【ポスター発表】

福祉系大学生による障がい者の理解
－本音と建前－

○　金城大学　　岡村　綾子（００３４４６）

キーワード：福祉系大学生，障がい者，理解

１．研 究 目 的

社会福祉系大学の学生は学年進行に伴い障がい者に対して関心をもつようになり，理解が深まるような態度の変化が見られたが，障がい者に対する顕在的態度(建前)と非顕在的態度(本音)とは一致しなかった。また,「障がい者とは」と尋ねられた場合に描かれる障がい者のイメージについて検討した結果，障がい者のイメージは概念的な理解より、見てすぐ気づく外見的な理解に基づく場合が多かった。そして,大学１年生と４年生を対象に小・中学生に対して障がい者について説明する場合の説明内容を求め，外見的理解と概念的理解の学年進行に伴う使い分けを検討した結果、１年生は４年生よりも概念的に説明している者が多く，逆に外見だけで説明している者が少なかった。そこで小・中学生に対して障がい者について説明する内容を文章で説明する場合と選択肢で選んだ場合の違いについて及び学年進行による使い分けについて検討した結果，選択肢から選択させる場合は，記述により説明を求めた場合に比べ思いつかなったことなどが選択肢に存在するために選択肢自体が説明のヒントになる場合があるにもかかわらず，１年生が 2，3，4 年生より概念的説明の選択肢を選んだ割合が多かった。その理由として，障がい者に関する講義を受けていない時期であることを踏まえると，大学入学以前に受けた障がい者に対する説明の影響が考えられた。そして、2，3，4 年生が概念的説明の選択肢を選ぶ理由としては，障がい者に関する講義やボランティア活動，実習などが影響していることも考えられたが，障がい者に対する本音としての理解より建前としての理解が影響していると考えた。

以上を踏まえ今回は，小・中学生に対して障がい者について説明する内容を選択肢で選んだ場合，及び障がい者について「本音」で説明する場合と「建前」で説明する場合の違いについて学年進行に伴う変化について検討することにした。また，本音・建前と概念的な説明・外見的な説明との関連について考察することにした。

２．研究の視点および方法

１）調査協力者　Ａ福祉系大学の 2018 年度 1 年生 139 人，3 年生 128 人，4 年生 149 人、計 416 人を調査協力者とした。

２）調査内容　障がい者に対する読書の有無，障がい者に関するテレビ等の視聴の有無，一般的な問いかけによる障がい者に対する態度，障がい者と考える状態，初めて障がい者と関わった時期とその人が障がい者とわかった理由，地域の小・中学生に障がい者について説明する内容，障がい者について「本音」で説明する内容，障がい者について「建前」

で説明する内容などとした。

３）調査手順と調査用紙の回収　年度初めのオリエンテーションの機会を利用して，質問紙を配布し，自記式集合調査を行った。質問紙調査用紙については，1 年生は 139 人に配布し，136 人から回収でき（回収率 97.8%），3 年生は 128 人に配布し，115 人から回収でき（回収率 89.8%），4 年生は 149 人に配布し，121 人から回収できた（回収率 81.2%）。

３．倫理的配慮

本研究は，日本社会福祉学会研究倫理指針を厳守し実施した。調査対象者には，研究の趣旨や得られたデータは研究目的以外には使用しないこと，調査結果の検討・分析に際して個人が特定できないように配慮することを説明後，調査への参加を要請し，調査参加をもって研究協力受諾とした。本研究は金城大学研究倫理委員会の承認を得た。

４．研 究 結 果

小・中学生に対して障がい者についてどのような説明をするかという質問に対して用意された選択肢から選択させた(複数回答可)。各学年の回答された選択肢を外見的な説明の選択肢と概念的な説明の選択肢に分類し，各学年の選択肢の総選択数で外見的説明と概念的説明の各選択数の合計を除して割合を出した。１年生が外見的説明の選択肢を選んだ割合は55.3%,概念的説明の選択肢を選んだ割合は44.7%，3年生では外見的説明が50.1%，概念的説明が 49.9%，4 年生では外見的説明が 46.9%，概念的説明が 53.1%であった。

また，小・中学生を対象に障がい者について，「本音」で説明する場合と「建前」で説明する場合を同じ選択肢から選択させた(複数回答可)。「本音」で説明する場合，１年生が外見的説明の選択肢を選んだ割合は 61.2%，概念的説明の選択肢を選んだ割合は 38.8%，3 年生では外見的説明が 59.5%，概念的説明が 40.5%，4 年生では外見的説明が 56.0%，概念的説明が 44.0%であった。「建前」で説明する場合，１年生が外見的説明の選択肢を選んだ割合は 36.3%，概念的説明の選択肢を選んだ割合は 63.8%，３年生では外見的説明が 35.8%，概念的説明が 64.2%，4 年生では外見的説明が 37.0%，概念的説明が 63.0%であった。

５．考 察

小・中学生を対象に障がい者について説明する場合、選んだ選択肢は学年進行に伴う変化は殆ど認められず，各学年とも外見的説明より概念的説明の選択肢を選ぶ傾向がみられた。また，障がい者について「本音」で説明する場合は，各学年とも外見的説明の選択肢を選ぶことが多く,「建前」で説明する場合は，各学年とも概念的説明の選択肢を選ぶことが多かった。上記のことから，障がい者についての説明においては「本音」では外見的なことで説明し,「建前」では概念的なことで説明していると考えられる。

以上から，障がい者について説明する場合,「本音」もしくは「建前」の使い分けするという二面性があると言えるだろう。特に，学年進行により「本音」と「建前」を使い分けが顕著になると考えられた。